

感謝の欠乏

バーバ・ムクターナンダが語る

私が旅をしながらサーダナーをしていた時に、インドの村々でしばしば耳にした話がある。それはある心の広い人物と物乞いについての話で、村人たちはマラーティー語の詩の形で吟唱していた。

ある物乞いが、裕福で心の広い女性の戸口を訪れていた。彼は牛乳を乞い、彼女は快く与えていた。これは毎日、12年間続いた。

ある朝、物乞いが女性の戸口に着くと、彼女はその日は牛がまだ乳を出していないと彼に言った。しかし彼女は、これで良ければどうぞと、手桶1杯のバターミルクを持っていた。

物乞いはたちまち逆上して、彼女に怒鳴り始めた。「あんたはなんてけちなんだ！ あんたはとても裕福じゃないか。牛小屋を持っている。牛乳の川があんたの家に流れている。それなのにあんたは俺に牛乳をくれない。代わりにただのバターミルクをあげると言って。要するにあんたは、牛乳をあげるつもりなんかない、と俺に言っているんだ」

慈善家は物乞いの反応にびっくりした。彼女は12年間、毎日彼に牛乳を与えてきた。しかし、このほんの1回の断りで、彼はかんかんに怒り、容赦なく彼女を非難したのだ。

数分後、物乞いはバターミルクをもらわずに去った。

